学校教育学研究，2000，第12巻，pp.37-41

親の統制
－自律性が小学生の「おけいこごと」への態度におよぼす影響－

浅川潔司・古川雅文（兵庫教育大学）　賀内美鈴（黒田庄町立楠丘小学校）

本研究は，親の統制－自律性が，例えばピアノや珠算といった「おけいこごと」に対する子どもの態度にどのような影響を与えるかを調査したものである。小学校4年生と6年生，約160名を調査対象とし，分析には140名のデータが採用された。親の統制－自律性に関しては，Deciらの教師用志向性尺度を改変した質問紙を使って，児童による認知を測定した。また，「おけいこごと」への子どもの態度を測定するため，おけいこごと態度尺度を開発し，この尺度を利用して測定した。主な結果は，(1) 4年生から6年生にかけて，男子の「楽しさ」得点が減少した。(2) 4年生において，自律性志向が低いとみられる親の子どもは，「学校外教育に対する評価」得点が高かった。

キーワード：おけいこごと，小学生，親の統制－自律性志向

浅川　潔司：兵庫教育大学・幼児教育講座・教授，〒673-1494　兵庫県加東郡社町下久米942-1，
E-mail: kasa@edu.hyogo-u.ac.jp
古川　雅文：兵庫教育大学・学校教育研究センター・助教授，〒673-1421　兵庫県加東郡社町山国2007-109，
E-mail: kogawa@ceser.hyogo-u.ac.jp
賀内　美鈴：黒田庄町立楠丘小学校，〒679-0313　兵庫県多可郡黒田庄町岡379

Affects of parents' orientations toward control v.s. autonomy on their children's attitude toward "okeikogoto (lessons after school)" activities

Kiyoshi Asakawa, Masafumi Kogawa (*Hyogo University of Teacher Education*)
Misuzu Kauchi (*Kusugaoka Elementary School*)

The present research was planned to investigate how parents' control-autonomy orientations affects on their children's "okeikogoto (i.e. Piano lesson, lesson of calculation on the abacus etc.)" activities in daily life. One hundred forty children of 4th and 6th grade from public elementary school in central Hyogo prefecture took part in the study. First, parents' autonomy-control orientation perceived by their children was assessed using a questionnaire constructed by Deci et al. (1981). Then, Children's attitude toward 'okeikogoto" was measured using the Okeikogoto Attitude Scale for Children. The main findings were as follows: 1) As to happiness of okeikogoto, those scores significantly decreased between 4th grade and 6th grade in boys, while there was no significant age group difference in girls, 2) the effects of parents' control-autonomy orientation on attitude scale were partially appeared in a sub-scale scores of "evaluation of outside school educational activities." That is, the lower autonomy oriented group showed higher mean scores than the other in 4th grade, there was, however, no significant parents' control-autonomy effects on those sub-scale scores in 6th grade. Those findings were discussed from a developmental point of view.

Key Words: lessons after school, parents' orientations toward control v.s. autonomy, children's attitude

Kiyoshi Asakawa: Professor of Department of Childhood Education at Hyogo University of Teacher Education. Shimokume, Yashiro-cho, Kato-gun, Hyogo, 673-1494 Japan. E-mail: kasa@edu.hyogo-u.ac.jp
Masafumi Kogawa: Associate Professor of the Center for School Education Research at Hyogo University of Teacher Education. Yamakuni, Yashiro-cho, Kato-gun, Hyogo, 673-1421 Japan. E-mail: kogawa@ceser.hyogo-u.ac.jp
Misuzu Kauchi: Kusugaoka Elementary School. Oka, Kurodasho, Taka-gun, Hyogo, 679-0313 Japan.

問　題

本研究の主たる目的は，小学校児童の学校外での種々のおけいこごと（たとえば，珠算，習字，ピアノなど）を遂行する際の態度に，親の統制－自律性が与える影響について発達的な観点から検討することであった。

Deci, Schwartz, Sheinman & Ryan (1981) によれば，大人の統制－自律の志向性が，子どもの学習活動に影響することが示唆されている。彼らの研究では，まず教師の統制－自律の志向性が質問紙によって測定され，さらにそれらの教師が担任する小学校4年生～6年生の学級風土の知覚，内発的動機づけおよび自尊感情に関するデータが収集された。そして，これらのデータを分析した結果として，教師が自律志向である学級の児童は，教師が自律性に対してより支持的であると認知すること，さらに，児童はより強く内発的に動機づけられ，自己のコンピテンスをより高く認知しているという事実を見いだしたのであった。

小泉 (1995) によれば，ある目標に向かって行動を触発し，その行動を維持し，さらにその行動を一定の方向に導いて目標を達成することが動機づけの内容である。この際，2種類の動機づけのあり方が確認されているが，それは外発的動機づけと内発的動機づけである。前者の場合，行動の目的が仕事や学習活動そのもの以外の何らかの外的報酬にある。たとえば，ときに大人たちは賞罰や競争を用いて子どもの動機づけを高めることがあるが，これらが外発的動機づけとよばれるものなのである。他方，人間は新しい事態や新奇な事物に出会うとき，これらに対して素朴な興味や関心を抱くのが通常である。このような文脈で個人が仕事や学習活動そのものに興味を抱いたり関心をもって自発的に取り組むなどの場合，これを内発的動機づけとよぶ。

内発的動機づけについて，さらに興味深い指摘もDeci (1980) によってなされている。個人がある活動に内発的な動機づけのもとに従事している場合にも，その活動が外的な報酬を得る手段化していることもあると彼はいうのである。たとえば，ある子どもが自己の興味や関心のもとに自ら進んでピアノの練習に熱心に取り組んでいるようなとき，これはまさに内発的な動機づけに基づく活動ではあるものの，実はその背景に，親からの承認や賞賛などの外的報酬を期待しているということもありうるのである。このことは，子どもにとっての意味ある他者が子どもに対してどのように働きかけるかによっても，子どもの動機づけの質が影響を被ることを示唆している。Deci et al. (1981) の研究はこのような論点を背景になされたものであった。

ところで，子どもの内発的動機づけに影響を及ぼす外的な要因を考えるとき，その影響を与える他者の特性について検討する必要があろう。Deci et al. (1981) の研究では，子どもの学校内での学習活動が目的行動であったので，この場合には子どもに働きかける意味ある他者としての教師の統制－自律の志向性が取り上げられている。子どもの日常の生活世界においては，学校場面も重要な生活世界の一部に違いないが，学校外においてもその活動の場は多岐に広がっている。

幼児期から児童期にかけて多くの子どもたちが各種のおけいこごとやスポーツ少年団活動，あるいは学習塾がよいを経験するのが我が国の現状である。このような活動に関しては，教師よりもむしろ保護者の方がその内発的な動機づけに対しての影響力を行使する外的要因となると考えるのは妥当であろう。親がどのような志向性をもっているのかということによって，子どもたちがこのような学校外の学習活動に取り組む態度や評価，受けとめ方に影響が生じると予想される。

そこで本研究では，小学校4年生と6年生を対象として，子どもが認知する親の志向性が当該の児童たちのおけいこごと活動にどのような影響を与えるのかといった点について発達心理学的に検討することを目的とした。小学校の中・高学年を対象にしたのは，これらの時期が子どもそのものが他律性を減じ自律性を強めていく時期（たとえば，Kamii & DeVries, 1980）と考えられるからであった。

方　法

被調査者：おけいこごと態度尺度の作成にあたっては兵庫県下のH大学学生 43名（男子学生 21名，女子学生 22名）が参加した。本調査に被調査者として参加した児童は，兵庫県小野市の公立小学校4年生と6年生の163名であった。このうち，おけいこごとの経験があり，回答に不備のなかった 4 年生64名（男児 30名，女児 34名）および6年生 76名（男児 31名，女児 45名）の計140名が分析の対象となった。

材料：おけいこごと態度尺度については，小学生時代におけいこごとを実際に体験している大学生を対象とした予備調査において，それらの活動に対する評価が自由記述で回答するように求められた。これらの記述をＫＪ法によって分類整理した結果，計 16項目が抽出され，おけいこごと態度尺度が構成され，本研究で使用された。

親の志向性の測定にあたっては，Deci et al. (1981) によって考案された教師用志向性尺度が改変されて使用された。この測定尺度は本来教師用に作成されたものであったが，親の志向性を測定するために，学校における問題場面を家庭における問題場面に改めて構成されたものであった。

その例文の内容はたとえば次のようなものであった。「太郎君はいつもならば学校から帰ったらすぐに宿題をすませます。しかし，最近はやる気がおきません。今日も，学校から帰ってきてもなかなか宿題をせず，ゴロゴロと寝ころんでテレビを見ていました。そこへ，太郎君のお母さん（お父さん）がやってきて…」

各問題文にはあらかじめその問題場面に対する実行可

能な4つの方策が用意されたが，これは両親が緩やかな統制，高統制，緩やかな自律，高自律である4つの場面を想定し，小学生が親の志向性をどのように認知しているのかを測定するものであった。その内容はつぎに示すとおりであった。

1. 大人が問題解決策を決定し，その策を確実に実行させるために賞罰を使うもの（高統制反応，HC）

2. 大人が解決策を決定し，児童を罪の意識に目覚めさせたり，そのことが児童のためになることを協調して，児童にその解決策を実行させるもの（緩やかな統制反応，MC）

3. 問題解決のために，児童に社会的比較の情報を利用するように促すもの（緩やかな自律反応，MA）

4. その問題に備わる様々な要素を考え，自分の力で解決に至るよう，児童を促すもの（高自律反応，HA）

これらの反応に対する得点化をおこなうために，高統制反応 -2点，緩やかな統制反応 -1点，緩やかな自律反応 +1点，高自律反応 +2点が付与された。上記の4場面それぞれに評価点が付与されたので，合計得点の範囲は -8 点から+8点であった。

手続き：本調査の実施にあたっては，各学級を単位とする集団場面で質問紙が配付され，それぞれの学級担任の教示のもとに，回答が求められた後に回収された。

結　果

おけいこごと態度尺度の因子分析結果：本研究の手続きにしたがって得られたおけいこごと態度尺度の反応に基づいて，まず因子分析（主因子解，ヴァリマックス回転）がなされた。その結果はTable 1に示すとおりであるが，固有値 1.00 以上の解釈可能な3因子が抽出された。本研究で用いられたおけいこごと態度尺度は本来 16項目から構成されていたが，一次的因子分析の結果から，因子負荷量が著しく低い項目あるいは複数の因子に対して同程度の負荷を示すなどの3項目は除かれた。Table 1に示す結果はその後，改めて因子分析が実施された結果であった。

Table1　おけいこごと態度尺度についての因子分析結果（主因子解→バリマックス回転）

質問項目	F1	F2	F3
1. 大変だ	-.72	.19	.09
2. 楽しい	.63	-.09	.14
3. 苦しい	-.56	.03	-.07
4. 毎日の生活が窮屈になる	-.54	.04	.08
5. みんなと遊ぶ時間がなくなる	-.44	-.05	-.02
6. 友達に会うのが楽しい	.34	-.19	.14
7. 学校では習えないことを習うところである	.07	-.70	.08
8. 感情が豊かになる	.31	.57	.00
9. 将来役に立つ	-.01	-.01	.70
10. 自分を成長させるものである	.01	-.30	.43
11. 自分の才能を伸ばすものである	-.12	-.13	.39
12. 仲間が増える	.26	-.20	.35
13. 親が無理やり行かせるものである	-.22	-.02	-.00
2乗和	2.11	1.07	1.04
寄与率	16.24	24.51	32.55

最初の因子に関しては，その項目内容からして，おけいこごとを実行する際の「楽しさ」にかかわる因子と解釈された。第2因子については，「学校外教育に対する評価」の因子と命名された。最後に，第3因子は，「自己発展の因子」と名づけられた。

子どもによる親の志向性の認知：次に，子どもたちが親の志向性をどのように認知しているのかを検討するために，4つの例文問題からなる志向性尺度の得点化がなされ，この値に基づいて全標本の平均得点が算出された。その結果，志向性尺度における平均得点は -2.10であった。そこで，志向性尺度得点が -8～ -3点の範囲にある児童を相対的に親に対して自律性水準が低いと認知する群（統制志向の親群）とし，-2～ +8点の範囲にある者を相対的に親を高自律的とみなす群（自律志向の親群）とした。

親の志向性が子どもたちのおけいこごとに対する態度形成に及ぼす影響：親の志向性の及ぼす影響を検討するにあたっては，それは性や学年によっても異なるのかどうかといった点も検討した。この目的のもとに，各群別におけいこごと態度尺度の3因子ごとに平均点と標準偏差を算出した。その内容を整理したものがTable 2 である。

Table2　おけいこごと態度尺度の各群ごとの平均点と標準偏差（括弧内は標準偏差）

学年	4年生		6年生	
自律水準群	統制	自律	統制	自律
第1因子				
男子	3.75	3.00	1.33	1.53
	(1.69)	(1.92)	(1.31)	(1.31)
女子	4.08	3.48	3.52	3.43
	(1.80)	(1.57)	(1.39)	(1.16)
第2因子				
男子	1.75	1.21	.50	.89
	(.68)	(.89)	(.57)	(.57)
女子	1.46	1.24	1.06	1.14
	(.78)	(.77)	(.89)	(.77)
第3因子				
男子	3.63	3.64	3.58	3.58
	(.89)	(.63)	(.90)	(.90)
女子	3.31	3.43	3.48	3.14
	(.85)	(1.08)	(.72)	(1.10)

Table 2 に示された結果に基づいて，3つの因子ごとに，2（学年）×2（性）×2（自律水準）の3要因分散分析が実施された。その結果によれば，楽しさの因子に関しては，学年要因の主効果が有意であり，6年生群に比べて4年生群の方が，おけいこごとをより楽しいものと認知していることが明かとなった（$F=16.50$, $df=1/132$, $p < .01$）。また，女児群が男児群よりもおけいこごとの楽しさをより肯定的にとらえていることも

わかった（F＝19.57，df＝1／132，p ＜ .01）。しかしながら，自律水準の主効果は有意ではなかった。

交互作用に関していえば，学年×性の一次の交互作用のみが有意であった（F＝21.59，df＝1／132，p ＜ .01）。この内容は Figure 1 に示すとおりであり，下位検定（HSD法，以下同様）の結果，4年生群では有意な男女差は見られないが6年生群では，女児群の楽しさ得点が有意に男児群のそれを上回ること，そして女児群には有意な学年差は生じていないが，男児群では4年生群に比べて6年生群で当該得点が低下していることがわかった。

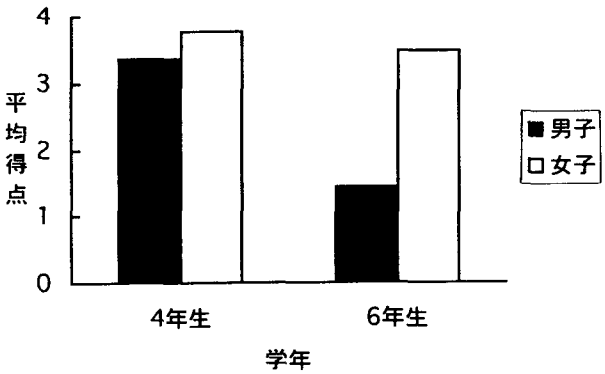

Figure1 第1因子（楽しさ）の各学年と性別ごとの平均得点

「学校外教育に対する評価」の因子についても同様の分析を行なったところ，学年の有意な主効果が認められ，6年生群よりも4年生群の方が有意に高得点を示すことが明かとなった（F＝13.63，df＝1／132，p ＜ .01）。性と自律水準の要因に関しては有意な主効果は認められなかった。そして，学年と自律性水準との交互作用が有意であった（F＝3.03，df＝1／132，p ＜ .02）。この交互作用の内容についてはFigure 2 に示すとおりである。下位検定の結果によれば，4年生群では自律志向の親群の得点より統制志向の親群の得点が有意に高くなっていた（p ＜ .05）が，6年生群では自律水準による群間の有意差は認められなかった。また，統制志向の親群において，4年生から6年生にかけて当該の得点が有意に低下していた（p ＜.01）が，自律志向の親群においては有意な学年差は生じていなかった。他の交互作用はいずれも有意ではなかった。

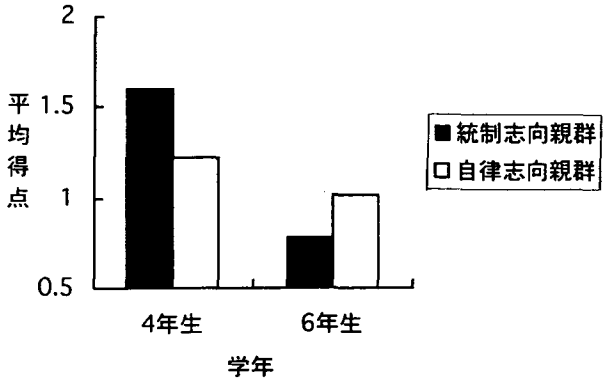

Figure2 第2因子（学校外教育に対する評価）の各学年と親の志向性群ごとの平均得点

最後に，自己発展の因子に関しても同様の分散分析が施されたが，どの主効果，交互作用も有意ではないことが確認された。

考　察

本研究は親の志向性がその子どもたちのおけいこごとに対する態度に影響するのかどうか，そしてそれは子どもの発達変数や性といった属性によっても変化が生じるのかどうかといった問題を検討するために企図されたものであった。

まず，楽しさの因子についての結果から考えると，このような側面では親の統制－自律の志向性が子どもの楽しさ認知に影響を与えるという結果は得られなかったといえる。この側面においては，むしろ発達的な変数や性変数が深く関与するというのが本研究の結果であった。そして，この結果は，親が自律的であるか否かによらず，6年生男児群が同学年の女児群や4年生男児群よりも低得点を示すという点で特徴づけられていた。このことは，男児においては小学校の中学年から高学年にかけて関心をよせる対象や楽しさを感じる対象がおけいこごと以外の活動に移行する可能性を示唆するものかもしれない。

学校外教育としてのおけいこごとに対する評価的な側面においては，親の統制－自律の志向性の影響が部分的に生じているといえる。この側面では，親が相対的により統制的であると認知する4年生群はおけいこごとを高く評価するが，6年生ともなると親の志向性が子どもの評価に影響しないという形で志向性の効果が生じていた。親の志向性が子どものおけいこごとの評価に影響を及ぼすといっても，この結果はむしろ予想とは異なるものであった。すなわち，自律志向性の強い親をもつ子どもほど，自己決定をすることが容易であるのならば，そのことが子どもの知的な好奇心を刺激し，自己充足感も形成しやすくなるので，学校外教育活動としてのおけいこごとに対してもより肯定的な評価をすると予想したのであ

るが，本結果はこのような見解を支持するものではなかった。

このことについては，以下のような点が，説明可能なことがらとして考えられる。まずおけいこごとに通いはじめる契機という点について考えると，小学生の年齢であれば，その多くは親からの情報提供や勧めによることが推測される。その際，統制的な志向性をもつ親であれば，子どもにおけいこごとを勧めるために，その情報が肯定的側面を強調する方向に偏りがちになる可能性が大であろう。他方，自律志向の親の場合，子どもの自己決定を重視する傾向にあるとすれば，提供する情報は肯定的，否定的側面の双方を含んでいて，子どもの自己決定を待つことが予想される。小学校4年生群の場合，親の両価値的な情報よりも，一面的な肯定情報の影響を受けたとも考えられる。

ところで，ピアジェ派の見解には，幼児期から児童期，青年期にかけて認知面でも社会性の面でも他律性から自律性へと向かう発達的な変化が生じるというものがある（たとえば，Kamii & DeVries, 1980）。彼女たちによれば，大人は力と権威を保有しており，それらの影響性を子どもに対して行使すればするほど，子どもの他律性が強化され，逆に自律性の形成が妨げられるという。

親をより統制的と認知する群の小学校4年生が6年生に比べて有意に高い得点を示したのは，その子どもたちが統制的な親のもたらす情報をより受動的に受け入れた可能性もある。親が統制志向的であるということは，言外に子どもを外的な大人の力によって支配する傾向にあることを意味している。そのとき，自律性の形成が十分な水準に達していない4年生ほど，こうした親の情報操作を受け入れやすかったのかもしれない。

つまり，統制志向の親がおけいこごとについて肯定的な情報ばかりを伝達し，そうした親の子どもはそれを疑いもなく受け入れるような傾向が，自律志向の親やその子どもに比べて大きかったのではないかという考えである。

また，高学年群ではより自律的な傾向が強まるために，より親の影響性が薄れ子どもたち独自のおけいこごと評価がなさるようになったために，評価得点が低下したと考えられる。

第3の因子に関しては，いずれの主効果も交互作用も有意ではなかった。この因子に含まれるのは4項目であり，その得点の範囲は0〜4点であった。Table 1の結果からも明らかなように，どの群においても平均得点は高く，そのことによって天井効果が生じたものと思われる。

引用文献

Deci, E. L. 1980 The Psychology of Self-Determination. 石田梅男（訳）自己決定の心理学　－内発的動機づけの鍵概念をめぐって－

Deci, E.L., Shwartz, A.J., Sheinman, L., & Ryan, M. R. 1981 An instrument to assess adults' orientation toward control versus autonomy with children: Reflections on intrinsic motivation and perceived competence, *Journal of Educational Psychology*, 73, 642-650.

Kamii, K., & DeVries, R. 1980 Group games in early education: Implications to Piaget's theory. 成田錠一（監訳）幼稚園保育所　集団遊び：集団ゲームの実践と理論　北大路書房

小泉令三　動機の発達と動機づけ　秦・平井（編著）児童心理学要論　北大路書房

謝　辞

本研究の遂行にあたり，小野市立小野小学校の教職員の方々ならびに4年生および6年生の児童の皆様に快く協力を賜りました。著者一同，ここに記して衷心より感謝申し上げます。

（1999. 7. 30　受稿，1999. 8. 31　受理）